

「浦河教会の歩みと分かち合い礼拝」

浦河教会 向谷地 生良

2012年10月10日 教職講座講演
於：しんしのつ温泉・たっぷの湯

はじめにー自己紹介

みなさん、おはようございます。ただいま紹介いただきました浦河教会の向谷地です。

教職講座で話をするのは、おそらく初めてではないかと思えます。私は青森県の十和田市にある教団の三本木教会で受洗（高2）し、今から40年近く前になりますが、北星学園大学で福祉を学ぼうと北海道にわたり、学生時代は、東札幌教会で教会生活を過ごしました。当時の牧師は中村清信先生で、宣教師としてカイトン先生や、今、名寄にいらっしゃるウィットマー先生がいらっしゃる、ススキノにあった伝道喫茶「グッド・アワー」を通じて、教会に導かれた多くの若者でにぎわっていました。

私は、その充実した教会生活から2年ほどで突然遠ざかり、筋ジストロフィーなどの難病をかかえる子どもや若者を支援するボランティア活動にかかわるようになりました。なぜ遠ざかったかというところ、私は中2のときから教会へ行っており、行くのは当たり前だとおもっていました。ところが、田舎から札幌に出てきて北星の男子寮で生活を始めましたが、私が育てられた教会はファンダメンタルなホーリネス系の教会で、当時の田岡伴治牧師は、非常に厳格な方で、まじめな方で「都会にキミを送り出すのは狼の群れに羊を送るようなものだ」といわれました。北海道に旅立つ日には、駅まで見送りに来てくれ、本当に大きな声で（それもとても音痴だった）、「また、会う日まで～」と送別の讃美歌を歌ってくれ別れの寂しさ以上に、恥ずかしさが上回り、早く列車が出てくれないかと、こころの中で祈ったものです。北星の寮に着いたら次の日には手紙が届いており、「世の中には誘惑が多いが、酒やたばこの誘惑が多い中で、祈ることを忘れず、それと戦いながらどうか札幌での生活をするように」と書いてありました。

すると、その晩、真夜中に、寮の先輩にたたきおこされ廊下に整列させられました。入寮式でした。入寮式と言って、シートにくるまれたダンボールがあり、そこに1升ビンが並んでおり、その酒を雑巾バケツに注ぎ回し「青森県十和田市出身社会福祉学科の向谷地生良です。よろしく願いいたします！」と名前を言った後に、バケツの”酒づき”を先輩から受け取り、飲むという儀式がはじまりました。「酒と煙草にはくれぐれも注意を」という手紙を頂いた晩に入寮式として酒を飲まされ、それが最初の試練でした。私は飲んだ振りをして廻していたのですが、他の学生たちはグデングデンによっていました。入寮式の後には、入寮コンパが待っていました。ススキノに繰り出し、今でもある“羊々亭”というビアホールで死ぬほどビールを飲まされました。生まれてこの方、このような生活と全く無縁な暮らしをしてきた私は、ススキノにもびっくりしましたが、とにかく、毎日が大きな試練で、この現実の落差に思い悩んだものでした。

私はとにかく変な学生だったと思います。私は、学生生活では大いに悩み、苦勞をしたいと思っていました。生きることの、より根源的な苦悩に向き合いたい、だから、「どうやったら、もっと苦勞できるか」と考えていました。そこで、思い立ったのが、仕送りを断って自活することでした。当時の中村清信牧師に相談したら、手稲金山にある特養の神愛園を紹介されました。神愛園で、住込みのナイトヘルパーとして仕事をしたのが、福祉の現場に飛び込んだ最初の体験になりました。昼は大学に通い、夜は園での食事介護、おむつの洗濯、夜間の処置の補助業務、電話番という仕事のすべてが、私にとっては、今につながる様々な思索と訓練の時となりました。特に、特養ですから、多くの入所者との死という別れは、福祉の仕事の根源を問われる特別な経験でした。

そんな中で、私は難病患者や筋ジストロフィーの子どもたちへのボランティアをしながら私は一つの壁にぶつかっていました。それというのも、あまりにも教会生活が充実していて楽しかったのですから、なにか、自分の充実感と楽しさとにものすごく後ろめたさを感じるようになったのです。それで、私は礼拝に行く時間よりも、筋ジストロフィーをかかえた人の車椅子を押したり、お

ぶって競馬場へいったり、学校にも行けずに在宅で暮らす難病の子供たちのボランティアに時間を割くようになりました。

「霧深き河」浦河へ

そんな私でしたが、卒業間際になって浦河にある病院の精神科専属のソーシャルワーカーとして就職が決まったとき、一番最初にしたかったことは、とにかく教会へ行きたいということでした。浦河は、就職先としては、不人気で誰も応募者が居なくて、一度は取り下げになった就職先でした。しかも、福岡県と同じ面積を持つ日高のたった一人のワーカーで、もちろん、病院にも誰も指導者がいません。最も不安なことは、難病や障がい者の支援には経験があっても、精神科領域というのは、まったく未経験でした。しかし、町の寂しさも含めて、何よりもその大変さと、条件の悪さにうろたえている自分のがっかりして私は浦河行を決めました。

浦河に赴いた日、町は今まで見たこともないほどの濃い霧で覆われ、港には霧笛が寂しく鳴り響いていました。そして、「教会に行きたい」と思って足を運んだ浦河教会は無牧師だったんです。当事は数人の信徒によって礼拝が守られ、高校生が司会をし、カセットテープで説教を聴いて、奏楽のない礼拝をしていたというのが当時の浦河教会の様子でした。ところが、その無牧師の教会に、私は不思議な落ち着きを感じました。そんな私に声を掛けてくださり、家に招いてご飯を食べさせてくれたのが若い近藤清徳さん、秀子さんご夫妻でした。秀子さんのお母さんがアイヌ民族の出身の方で、お父さんが今でいう北朝鮮から強制的に連れてこられた経験を持っていました。秀子さんのお父さんは、過酷な労働で体を壊し十分な仕事をできず、家族は大変貧しい中を生きぬいて来ました。近藤さんが暮らしている浦河の井寒台は、日高の中では一番良質な昆布のとれる浜ですけど、その浜沿いの近藤さんの家に上がり込み、仕事の愚痴を聞いてもらい、また、近藤さんを通して、はじめて北海道のアイヌの人たちの歴史に触れるわけですね。その辺の詳しいことは、ちょっと宣伝になりますが、『「べてるの家」から吹く風』（いのちのことば社）にそのエピソードが書いてありますので、読んでいただければと思います。そんな浦河で暮らしはじめて、私は北海道の歴史がさまざまな形で凝縮されたこの町で暮らすことに、特別な思いを持つようになりました。

そこで、私がソーシャルワーカーとして仕事を始めた時にしたことは、この町で一番困っている人を紹介して下さいと保健師さんをお願いすることでした。そして、一番最初にソーシャルワーカーとして家庭訪問したのがアイヌの人たちでした。本当に向こう三軒両隣や親戚の家を訪問して、アルコール依存症ではない人を探すのが大変なくらいで、みんな家族が荒れていて、それを何世代もわたって繰り返して行く。その家族の中を毎日毎日走り回りながら、正に北海道の歴史の一コマと真正面から対峙し、もまれに揉まれたのが私の青春時代です。

牧師招聘

そんな中で、北海教区と苫小牧地区の祈りと支えをいただき1980年に宮島利光牧師ご一家を浦河に招くことができました。実は、当時のブロック造りの会堂の隣に、信徒の献堂によって1975、6年に建てられたりっぱな新会堂があったんですが、維持費のねん出が難しく宮島先生が来られるまでは空き屋になっていました。私は79年から会堂に住み込みしながら教会生活を続けていましたが、その翌年にここに宮島先生ご一家が移って来られたわけです。そして、そのころに会堂の空き部屋に、精神科を退院したメンバーが住みはじめました。そういう意味では、この浦河の教会に宮島先生ご一家が共同牧会の支えの中で与えられたということは、本当に大きな恵みでした。まさにメンバーにとっては「家族」が与えられたのです。

ここで、この浦河教会の分かち合い礼拝につながる歴史を紐解く上で、ちょっとふれておきたいことがあります。専門的な話しになりますが一今もそのような傾向が残っていますが一精神医学と言うものはどちらかというと、力動精神医学といって、フロイトの精神分析学、いわゆる、人間の深層心理の中にあるひとつの見えざる力が人間の表面的な振る舞い、行動、病を動かしている。抑圧された見えざる無意識の意識を引き出し、本人がそれに気付いて行くことが回復、という考え方がありました。そのためにはクライアントに向き合う治療者は、自分のプライバシーにしっかりと衝い立てをたてて見せないようにしなければならない。プライベートな、例えば私なりの生活を見せることによって、その人のうちに混乱が生じる、転移が生じるという考え方です。ですから、当時から精神科の現場には当事者とは距離をもって接して下さい、という距離感がとても重要なキーワードとしてありました。

ところが、私が学生時代に、難病の患者さんたちの運動ですとか、1977年に「いちご会」を立ち上げた小山内美智子さんたちとか、重度の障がいを持ちながら地域で暮らそう、という運動をしていた小山内さんたち、そういう彼女たちと学生時代から交流していた私たちは、難病とか、ハンセン氏病もそうですし、重度の障がいをもった人たちの世界と専門家との間に距離感を持たなければならない、という、そういうことをいわれたことがない。とにかく一緒にその現実を担う、そういう関係性が成立していたにも拘わらず、精神医療に行ったとたん、距離をもたなければならない、という声があちこちから聞こえてきた。そういう声にはとても違和感を感じました。

ずっと遡ると、私はソーシャルワーカーですから、ソーシャルワークというこの実践がいつから始まったかということ、産業革命の当時のイギリスの教会から始まったわけですね。1800年代の産業革命で貧富の格差が進み、当時は子どもたちも労働力としてどんどん工場に雇われて、そして、もう今では信じられないくらいの劣悪な労働環境の中で子どもたち自身が健康を害していく、また、使い捨てられた労働者たちはスラムを形成していく中で、当時の教会のメンバーたちはスラムの中に自ら居を構えて共に住む中で、この現実を変えるというチャレンジをし続けたわけです。それが後にセツルメントという、学生を中心とした活動につながって行く。そしてその教会のボランティア活動をより継続的に専門的に教育して、そこに専従のスタッフとして送り込もう、ということでいろんな学びの場が出来て行き、それがソーシャルワーカーという形で職業化して行くという歴史があります。

そういう歴史の中で、私がソーシャルワーカーであると意識した時点で、私の意識は1800年代よりずっと私たちの大先輩がスラムに入って行き、当時の貧富観というのは、この人たちは道徳的に墮落した人たちであって、だから魂の救済をしなければならない、という、今から考えると少し違うんじゃないかというような、そういう部分もあったにはせよ、その現実の中に飛び込んで行き、一緒に暮らす中でこの現実を変えようと取り組んだ視点を、私はソーシャルワーカーであり、なおかつ、教会に連なるものとして、イメージを持っていたわけです。そういう意味では、「距離をとる」という”常識”に対してささやかな抵抗を試みたわけです。私はやんちゃな人間ですから、名刺を作るときに、自分の住んでいる所や電話を知られたらまずいよ、ややこしくなるからそこは気をつけるように、と先輩たちのアドバイスを逆手にとって、私は病院の名刺の下に自分の住所と電話番号をしっかりと印刷して患者さんや家族に配って歩きました。そして、いつでも相談にきてください、ということで、何かあったらそのひとの困難が起きている現場にまず足を運んでその人と一緒に考えるという、そういう仕事をしました。

ちょっと余談ですが、そういう仕事の仕方は、今でもそうですが、当時もなかなか理解されずに、病院のソーシャルワーカーは白衣を着て相談室にいて、来た人の相談にのるというのは、一般的な

イメージの中で、私は、病院にかかった人たちのカルテを片っ端からチェックして、この人は何かあるに違いない、たとえば、自殺未遂をして運ばれてきて、胃洗浄をして返された患者さんがいる。そういう方にも、相談もされてないのに、こっちから電話をして、この辺は口八丁で、「すいません、おととい病院に来られた時に私がお会いしてお話しすべきだったんですが、すぐ対応が出来なくて、時間が過ぎてしまって申し訳ございません。ちょっと、いろいろ経過見ましたら、何かいろいろご事情があったんじゃないかな、と思ひまして、たまたま近くに行くものですから、ちょっと寄らせて頂こうかと思ひました。」と、コンタクトをとって訪問しました。実は、その方は全盲で大量の睡眠薬を飲んで自殺未遂したということで、何かあるに違いない、と思ひお邪魔しました。その方は、朝起きたら、突然目が見えなくなった方ですが、最初は「なんで電話掛けてきた、相談することはない」と突っぱねられましたが、「そうかもしれませんが、目が不自由ということであれば、これからもいろいろな苦勞が出てくる可能性がありますので、あまり役に立たないかもしれませんが、いろいろご利用して頂ければ」と、言ったら、「じゃあ、ちょっと寄ればいいんでないか」と言われ、ちょっと寄らせてもらいました。

その他にも、浮気調査まがいの役割を頼まれたり、いろいろなことをしました。そのひとつが、すでに私が暮らしていた旧会堂の空き部屋に、求道中で精神科へ通院しているメンバーに入居してもらい一緒に暮らすということでした。当時、住宅事情は大変悪かったですから、浦河の教会の開いている部屋というだけで重宝されました。入居の第一号は、今のべてるの理事長をしている佐々木実さんたちです。これが、浦河の、今で言えばべてるの家につながる、共に暮らすということの、最初でした。

その隣の教会に、1980年に宮島先生ご一家が移ってこられて、まさに隣で暮らす、今で言えば、早坂潔さんとか、佐々木実さんとか、彼らも一つ家族として食卓を囲み、に交流をする場として用いられていくことになるわけです。今でも浦河教会の役員として、また、べてるの代表として活躍している早坂潔さんですが、潔さんはまさに、教会につながって、教会のマキ割のアルバイトを頼まれて、お昼に牧師館で食卓を一緒に囲んだとき先生に祈ってもらった食前の祈りによって大きな人生の転換をし、彼の中で何かが動いたということをよく言います。祈ってもらえた、祈りによって潔さんは教会に集うようになり、教会を支える人として用いられて行くわけです。

しかし、このレジメにも書いてありますように、浦河教会の歴史は、これをささえた苦小牧地区の共同牧会なしには語ることはできません。浦河教会が担っていた地域のもっとも重い課題を、苦小牧地区の教会、教区の諸教会が共に担い、祈りやいろいろな支えの中で、浦河教会は教会としての新しいステージを迎えるわけです。かつて浦河の教会は、主に公務員の転勤族の人たちの出入りの多い教会だったのですが、まさに「地域の悩みを悩む教会」に変えられて行くわけです。

最初にお話ししたような、アルコール依存症の家族が教会の中に深夜 SOS を求めて逃げ込んでくるとか、旧会堂で暮らすメンバーがアルコールとか、無銭飲食で地域に迷惑をかけるようなことも重なり、教会は、まだまだ差別的な見方が多かった「7病棟の人たち」が教会の隣に住み、いろいろなトラブルも経験する中で、まさに悩みの多い教会へと変えられて行くわけです。しかし、浦河教会は、この地域の悩みを教会の悩みとすることを通して、今度は教会の悩みを地域の悩みとして、前向きに返して行く、と言うことをすることによって、ついにはべてるの家を生み出していくということにもつながっていくと思ひます。

決して精神障がいをもった人たちのために、ではなく精神障がいというものを抱えた人たち、経験した人たちの可能性やその人たちによってもたらされた希望をむしろ地域に還元して行く。地域の中に伝えていく。地域の悩みを悩み、それが教会の悩みとなっていくためには苦しい時間を過ご

すなかで、精神障がいというものを抱えて生きてきた町民の、一人の市民の知恵や経験や信仰をむしろ良きものとして送りだしていく場として教会というものが変わっていく歩みが始まりました。

「語ること」

地域の悩みが、教会の悩みになった時、私たちの中にいろいろな葛藤が起きました。教会学校の一部の親たちは、精神科の人たちが集う教会には心配で通わせられない、ということが起きましたし、実際、教会に通わなくなった子どもたちもいたような気がします。そういうことも経ながら、浦河で教会が教会になってゆくひとつのプロセスの中に「語る」ということがあったと思います。これは浦河教会と言う以前に、実は浦河にはアルコール依存症の人たちがとても多い地域です。これは漁師さんが多いとか、土木関係に従事している人が多いとか、そういうこともあるかもしれませんが。もう一方ではアルコール依存症の人たちの多くがアイヌの人たちである。女性の依存症のひとつたちの殆どがアイヌの人でした。90床の精神科病棟のうち、アルコールの患者さんが30人にもなったことがあります。ちなみに、今は、ゼロです。

話はそれますが、何ヶ月か前に全国市町村別の平均寿命が厚生労働省から発表されていました。たまたまそれを見たところ、なんと、全道で一番町民の寿命の短い地域が浦河町でした。特に女性の寿命が短くて、全国市町村のワースト5なんですね。全国のランクの上をみても下をみても、ほとんど”どや街”をかかえる町村なんですね。そこと同じくらいの平均寿命、ということ。それが何を意味しているか。それから、全道で一番自殺率が高い地域ですね。浦河はご存知のように町民の3割の人たちがアイヌ民族の人たちと言うことで、日本一、アイヌ民族の人たちの割合が高い。所得水準も低く、失業率も、保護率も高く、子供の学力が全道一低い。何が影響しているのかわかりませんが、そういう意味で、さまざまな生きずらさの、すりばちで言えば、もっとも低い底に建てられた教会である浦河でこそ、教会が教会となるための下地があるということは今さらながら思い知らされたんですね。

次に、今のべてるの“非援助論”につながる発想が生み出された“ルーツ”をたどると先にも紹介したアルコール依存症の人たちとの関わりに行きつきます。アルコール依存症も、これも立派な病気なのですが、ただ、他の疾患と違うのは、このアルコール依存症を前にして精神科医は、「おれは治せない」とはっきり言うんですね。直せるのはあなた自身であり、あなたの仲間である。そして、依存症のひとつたちの大切なキーワードは何かというと「語る」こと、というわけですね。ですから、伝統的にアルコール依存症の人たちは、AA（アルコールアノニマス）という自助グループによって回復する。依存症と「語る」と言うことは大事なキーワードとして精神医療の中でも大事にされてきたわけです。ですから、私は1978年に浦河に行ったとき、浦河には全道でも有数の活発な断酒会がありまして、そのあと、AA（アルコールリック・アノニマス：匿名断酒会）という活動が立ち上がる。そういう意味で、「語る」という文化が当時の人たちの中にあつたわけです。

ところが、精神医療の世界の常識に、統合失調症をもった人たちは「語れない人たち」であり、「語らせてはいけない人」という常識がありました。アルコールと違って、統合失調症だけは、精神科医が特に薬物療法を駆使して治してあげなきゃならない人たちと思われてきた。しかも、統合失調症と言うのは、自分が統合失調症であることを認識できない、いわゆる病識のない人たちとしてあつた。そのなかで、「語る」という浦河での実践が、精神医学、精神医療界に、私が言うのも変ですが、大きな刺激を与えたんですね。

そして、べてるでは、そのアルコール依存症の人たちと統合失調症の人たちが一緒に昆布の仕事

をやろう、と昆布の下請けを牧師館ではじめて、そして、教会という場を借りて、アルコール依存症の人たちも（A・A）、統合失調症（S・A—スキゾフレニクス・アノニマス）という自己治療の場を作り、日曜日は教会に集い、祈り、という文化の中で、統合失調症を持った人たちがどんどん“言葉”を取り戻して行くんですね。今日は、「分かち合い礼拝」の紹介がポイントになるのですが、浦河では、礼拝は、耳を傾ける以上に、語る場にもなっていくわけです。さらに面白いことに、アルコール依存症の人と、統合失調症の人が共に働き、交わる中で、アルコール依存症の人が、統合失調症の人に、「お前は俺と似てる」と言い出すわけです。統合失調症の人がアルコール依存症の人の体験を聞いて、「ああ、似てる、似てる」とお互いに認め合う場面が出てくるわけです。

これは精神医学の常識ではありえない。統合失調症とアルコール依存症は全く違ったカテゴリーの疾患として、アルコール依存症の人たちの治療に関わった看護師は、統合失調症の人たちのところへ来たら使い物にならない、と云われるくらい別な世界として扱われる中で、浦河の教会では、べてるの中では、この統合失調症を持った人たち、アルコール依存症を持った人たちが互いに語るということにつながりあって「同じだね」ということで、そこに何か困難を生きる人間としての共通の土台を見出して行く、というプロセスがあるわけですね。たとえば、浦河の潔さんは、「精神ばらばら状態の早坂潔です」というわけですね。それは、アルコール依存症を抱えた人たちが。「私は、アル中のだれだれです」といって紹介する慣わしをそのまま自分の語りの始まりとしてとり入れている訳ですね。

浦河の教会は無牧師の時間も長かったですし、今でも私たちは自主礼拝の時間を過ごすわけですが、その礼拝を、私たちは「語る礼拝」として守るようになったわけです。普通ですと、一人の信徒が証しをして皆さんが聞くという形を取るわけですが、浦河では、「これから分かち合いをします」と一人ひとりが短い語りの証しをします。

べてるには「弱さの情報公開」という伝統があるわけですが、これは教会の証しを日々の活動の中に取り入れたようなものだと思います。「情報公開」は、これは決して偶然生まれたものではなくして、例えば統合失調症を持った人は、人の笑顔が急に鬼のような顔に見えてしまったり、私が「おはよう」とやさしく言ったはずなのに、その人の耳には「お前は嫌いだ」と伝わるわけです。それを私たちは、”誤作動”と言いますが、実は、これは統合失調症をもった人たちだけに起きるというのではなく、私たちも体調や気分によっては誤作動的な認知のしかたを普通にしてしまうのですが、統合失調症を持つ人たちには、それが甚だしいかたちで起きてしまう。そういう人たちとコミュニケーションをしてつながりあってお互いに暮らし合うための工夫としては、なにが必要かという、「今、おはようって言ったけど、ぼくのこと怒ってる？今、怒られているような感じしたんだけど」隣りの人にも、「今、目の前の人に怒られたように感じたんだけど、貴方もそんな風に感じました？」「いや、自分はぜんぜん怒られているような感じはしなかったよ」「いや、ぼくはぜんぜん怒ってないよ」「そしたら、これはぼくの誤作動だ」そういうコミュニケーションが必要になってきます。その人の顔を見たときに突然のその人のおでこに目玉がついて自分をにらんでいるような、そういう幻影がみえたときに、その人のやさしい表情にこちらがおびえてしまうような、そういう時、素直に「すいません、今、ちょっとこわいんですけど、いま、怒ってますか？」「今、どんな感じですか」ということを周りの人に正直に聞いてみる。そしたら、「何にも起きてないよ」「じゃあ、これは誤作動なんだ」「この誤作動ってどうして起きたんだろう」「ああ、今日は。朝ご飯食べてないから、おなかがすいたから起きた誤作動かもしれない。これ、腹ペコ誤作動だ・・・」そういうきめの細かいコミュニケーションを取らないと、ひとつの共同というものが成り立ちにくい人たちがいるということ、私たちは見出すわけです。

ただ、理解したり共感したりするだけではない、具体的に私とあなたたちとは何が違うのか、見えているもの、聞こえているもの、感じているもの。統合失調症と言うものはとても不思議なもので、誰もさわっていないのに、本当にさわられているような身体感覚が襲われるわけですね。いわゆる「体感幻覚」ですが、そういう人たちに「私、ちょっと触っていい？触ってみるよ。…この感覚と、誰も居ないのにさわられているような皮膚感覚とちがう？目をつぶったら見分けつく？」と聞くと、付かないっていうんですね。私たちの周りには、そういう知覚の違い、隔たりを持ちながら、この感覚を共有する事ができずに、孤立感、閉塞感をもって生きている人たちがいるわけです。

私は、この仕事をはじめた時、最初に、そのことに躓きました。理解できないんですね。なんでこのひとは機嫌が悪いのか。なんでやる気が出ないのか。なんで約束した時間に現れないのか。私は本当に苛立ちました。腹も立ったし、理解も出来ないで、もうこの人とは一緒にやって生けないという気持ちに何度もなりましたけれど、そんな自分に一番、ガッカリもしました。その中、それが何ゆえ起きているのかということ、分かつたろうとして私たちはいろいろ工夫に工夫をかさねたわけです。それが弱さの情報公開です。そういう意味で、分かち合い礼拝は、今でも牧師先生がおられない月2回くらいはみんなで分かち合いの礼拝をするんですけれど、一人ひとりが自分を証する。「私はこうです」「私はよかったところ、私は今、こんな恵みの中にいま生きています」「私はこんな苦勞をしています」。浦河の伝統は、よかったこと、それをさらに良くする、今週の苦勞、だいたいこの三つで話しをする。

そして、浦河の伝統は「問題」という言葉をあまり使わないんです。「問題点」を話し合わないという伝統を浦河の教会は大事にしています。というのは、ここに集まっている人たちは、問題を出したら、本当に問題の山でみんな埋め尽くされてしまって、大事なものが見えなくなってしまふ。だから、みんながいつも自分を語る時には、今週の恵み、まず、恵み。よかったところを分かち合う。そして、問題に対して自分が提案する。さらによくする点を提案する。そして、それでも苦勞が絶えない時は、「今週の苦勞」と言って、自分の苦勞を語る。そういう場の形成をしてきました。ですから、この場の分かち合いの中で、一人ひとりの今の苦悩とか辛さもそうだし、恵みもみんな分かち合いのなかで笑いが多いことですね。

ですから、浦河の教会の人たちは一人ひとりがどんな困りごとを抱えているのか、どんな大変さを抱えながら生きているのか、どんな誤作動が最近起きているのか、みんな知っています。すると不思議なことに、一人ひとりの苦勞の輪郭とか、生きづらさの形というのをみんなが知るとお互いがやさしくなり助け合い、場に寛容さが生まれます。そして、自分の物事の捉え方とか感じ方、いわゆる認知に対して常に前向きに考えてみる。自分はこのことについてこういう考え方があるんだけど、どうだろう、と、そういう突き合せて行くという作業をするわけです。

語りから生まれた「当事者研究」

その中から、まさに分かち合いの中から生まれたのが、私は「当事者研究」だと思っています。当事者研究というのは、まさに、何かひとつの出来事が起きたら、みんなで知恵を出し合って研究しよう、と向き合うことです。今まで研究対象であった統合失調症を持った人たち、統合失調症を持った人たち自身が、自分に起きているこの不思議な現象について知恵を出し合う、ということです。

例えば、最近、教会にも来ている30代の統合失調症の青年が、こんなことを言っていました。「自分は今までいろんな所を渡り歩いて来たけど、中学のときから全部いじめられてきた。職場でもいじめられ、会社でもいじめられ、学校でもいじめられて来た。だから自分はいじめのない浦河

に来たいと思ってきた。」

という話しでした。私は彼に言いました。「そんなことはない。ちゃんと順調に起きるよ」と。いじめと言う現象がきっと起きるはずだから、起きたら教えて、言ったわけです。そうしたら、彼は数日たって連絡をくれました。「○▽さんにいじめられています。」「彼は自分に罵声をあびせてきます。」それで、○▽さんを除いたメンバーで集まって、その場面を再現して、罵声をあびせられるというこの現象についてみんなで研究しました。

私は、彼に尋ねました。

向谷地「最近罵声を浴びせられたのはいつですか？」

青 年「昨日です」

向谷地「その罵声は、どのくらいのボリュームでしたか？」

青 年「すごいボリュームで怒鳴られました」

向谷地「じゃあ、その場に居た人は何人かいますか？」

青 年「何人か仕事をしてました」

向谷地「じゃあ、彼が罵声を浴びせられるのを聞いた人？」

そう言うのと誰も手をあげないで、首を傾げました。すると、彼は「あれっ」という表情をしました。私は言いました。「でも、これはわかんないですよ。たまたまみんな気が付かなかったかもしれないから、これからちょっと研究を開始して、実験もしてみましよう。そこで、私が提案したのは、もし、これから、仕事中に罵声をあびせられたら、となりに居る人に、いま、僕、罵声を浴びせられたんだけど、聞こえた？と遠慮なく確認するということです。彼は、さっそく罵声をあびせられた、つらいと思ったらすぐ隣りにいる人に、「今、罵声を浴びせられた」と言いました。すると「ボクには聞こえなかったよ」と仲間が言ってくれました。「あれ、そしたらぼくにしか聞こえなかったのかな？」そうすると、そのメンバーが「それ、誤作動なんじゃない？」「誤作動かな？」そんな実験をくりかえした時に、ある時、彼は私に言いました。「ぼく、最近誤作動が多いです。今まで、ずっと誤作動で苦しめられて来たということが最近分かってきました」

彼は、前の職場でも、自分はみんなからいじめられている、ということを上司に訴えたら、「そんなことはない」と言われ否定されて、「キミの思い過ぎだよ」と言われて、だけど彼は執拗にそれを訴えました。すると、そのうちに上司が切れちゃって、「いい加減にしろ！」ということになり、結局「やっぱりボクはいじめられているんだ」考えてしまったんです。

そういう中で、この「分かち合う」ということが今、当事者研究という形にふくらんで、具体的な生き安さを生み出して行く一つの手立てとして、今、広がりつつあります。

先週韓国から20人の視察団が来ました。当事者研究を学ぶためです。今、中国の留学生が当事者研究を中国に広めたい、ということで研究に取り組んで居ます。日本と韓国と中国、今、最も難しい国の人たちが当事者研究ということをつながりながら現実を変えてゆく連帯が始まりそうです。今年から東京大学が、この当事者研究を研究テーマにした学際的、国際的な研究プロジェクトが立ち上げました。私たちが半分、パロディーのようにしてはじめた活動が、今、学術的な興味を持って検討され始めたというのは、実におもしろいことだと思います。

子どもや若者たちの希望をとり戻す

話しは戻りますが、浦河教会は、「悩む教会」から「語る教会」へとつながってきました。ひとつの礼拝の場そのものを私たちは語る場として、礼拝の場そのものがただ聞くということ以上に語る場として、礼拝という場が共同体としてそれを確認する場であるとしたら、その共同性と言うの

は語ることによって、まさに語るというのは、祈ることも含めて、教会が教会になるという可能性を孕んだひとつの試みなのではないかと言うふうに私たちは思っています。

教会の中で、分かち合い礼拝の中で語られる一人ひとりの、人生の証し、また、苦勞の証し、それはその礼拝の中で完結するのではなく、それが、地域に、さらに広がりを持ったテーマとなって、今、色々なところにネットワークが広がりつつある、というふうに思います。その核に教会の、語る教会としての日々の営みがあるというふうに私は思っています。その語る教会である浦河の教会は、いま若い人たちが集う教会になっています。

宮島先生がたが来られたときから始めた土曜学校、今は「ノンノ学校」といっていますけれど、ノンノ学校も無牧師の期間、その人材不足から、「一時お休みせざるを得なかったんですけど、今、教会に集うべてるのスタッフらがもう一度起こして行こうということで去年からノンノ学校が再開し、今、子どもたちが教会に少しずつ戻りつつあります。

今、本当に若者、子どもが、時代の大きな歪み、生きることの大変さを負わされた状態としてあると私たちは思います。経済的に苦しくて学校を辞めざるを得ない、弟が高校に上がる、その学費を捻出するために高3のおねえちゃんが高校を辞めざるをえない。そんな話が現実には私たちの目の前で起きています。その若者たちの希望をとり戻すことに向けての大切な使命を教会から生み出して行こう、というのも私たちの新しい幻としてあります。

浦河の教会の、無牧師ゆえに生まれた「語る教会」の試みではありますが、無牧師であることを超えて、ひとつの教会のあり方としては面白いのではないかと紹介させて頂きました。ちょうど時間になりましたのでこれで終わらせて頂きます。

司会者

一時間にわたり、ありがとうございました。

それでは少しの時間質疑をして行きたいと思います

ご質問のある方はどうぞ。

質問 A 弱さの情報公開について、語るということの礼拝は素敵だなと思ったのですが、「語り合う礼拝」は障がいをもたれた方だけの礼拝ということなのですか、それとも、そうではない人も一緒に入っているのでしょうか

応答 全員ですね。分け隔てなく、そこに集った人が順番に語る、「証しのリレー」をして行くということです。

質問 B 60人くらいの方が礼拝に来る教会ですが、「語り合う礼拝」をするとすれば、どのようになるのでしょうか。

応答 浦河は30人ぐらいの人数で、それが成立しています。もっと多くなったら、ということですが、いずれにしても、ひとりひとり苦勞の輪郭というのがお互いに分かり、祈りあう工夫というのはとても大事なことだと思います。教会員同士がお互いのことを知らないのはとてももったいないと思います。浦河では、みんながみんなのことを実によく知っています。ですから個人情報の真逆の世界ですね。

質問 C 弱さを出し合うことの難しさを感じていて、何か、ありますか、と言ってもなかなか出てこないということを体験的に感じているのですが、そういう場合の切り口というものが何かあれば教えて頂きたいのですが。

応答 その前提には、いろいろ苦勞しているものとか、いわゆる弱さと言うのは、基本的にひとつの可能性だし、一人で抱えていたら宝の持ち腐れになってしまう。みんなで寄せ合ったらすごい可能性となる。希望につながる。基本的にいいものだとすることをみんな分かっている。そうした前向きの欠如をみんな抱えている、しかし、そうした欠如を欠如のままにしておく大変になる。それを持ち寄ることによって、欠如が新しい可能性になる、とすることを聖書は記していますが、そういうことをみんな知っているわけです。たとえば、美味しいものだったら、みんな食べて、と分かち合うわけですが、それと同じような意味で弱さを分かち合うほうがよい、という感覚ですね。そういう意味で、外から来る方はいつも驚かれる。浦河の教会の人たち、又、べてるの人たちは実によくしゃべりますから。

質問 D 浦河の教会の人々は弱さを抱えている人たちで、精神的な事柄の体験者の人たちとか、アルコール依存症の人たちやアイヌ民族としての生まれ育ちの中で差別を受けて苦しんできた人たちとか、今の浦河教会の分かち合い礼拝に参加していらっしゃる人たちの構成というとどんなふうになっていますか。

応答 礼拝は25人から30人くらいで常時守っています。いわゆるべてるのメンバーは7割くらいです。ほか、べてるで職員として働いている人たちとか、チームでいろいろしている人とかでしようか。また、ノンノ学校つながりで、子どもと一緒に礼拝しています。

質問 E 東京の教会の牧師です。べてるの家のことはかねてから伺っており、あらかた向谷地さんの本は読んで感銘をうけています。お会いしたら聞きたいと思っていました。それは、教会における牧師の位置ですね。今も弱さの分かち合いということをおいれましたが、既存の教会では、教会員の悩み、弱さは牧師に訴えて、牧師はそれを聞いて、それは牧会上の秘密ですね。それが横に広がらないことも無くはないのですが、むしろ牧師の存在が横のつながりを邪魔して、縦構造になっている。そうした中で向谷地さんのような現場の中から、むしろ牧師はどう見えていますか、牧師はどうなることを向谷地さんは希望されますか。

応答 変な言い方になりますが、浦河の教会は牧師を選ばない。どんな牧師さんでも歓迎する。いい意味で牧師さんに頼らない、そういう意味では自立している。それは決してみんな元気で前向きで苦勞せず、信仰深くて、ということだけでなく、様々なことが信徒の中でどんどん解消して行く。これは教会だけでなく、一般的には、悩みごとがあったら主治医やスタッフに相談する、という関係で成り立っているんですが、浦河は、もちろんスタッフも相談に乗るんですが、多くは、横の関係の中で解消されていく場合が多いと思います。当事者研究の中に、それがどんな失敗でも、それぞれの、あなた自身が生きてきた歩みの中に今の生きづらさを解消する大切なヒントが眠って居る。だから、自分の経験を大切にして、それを失敗だといって切り捨てないで、そこから今を生きる大事な可能性を発見して行こう、と言うのが当事者研究。そういう活動に慣れているみんなは、お互いにみんなが「自分自身で共に」、というキャッチフレーズで、お互いが自分の中に弱さとか負い

目と思われる出来事を含めて、自分の経験の中に可能性を見出して行く。

しかし、みんな一人ひとり誤作動的な感覚をもっているわけですから、例えば、普段幻視が見える人も目の前にいる人が本当の人なのか、幻の人なのか見分けが付かないときは、隣りの人にあなたに見えますか、と勇気をふるって聞いてみる、そういう意味での共同性みたいなものを大事にしていると生きられる。それを見える人が幻なのか実際の人なのか、その判断をあいまいにして暮らして行くといろいろ不都合が起きる、ということもみんな知っているのだから、遠慮なく周りをつながる、ということで現実が見えやすくなる。ですから、浦河では、あらかた、教会の中で、べてるのネットワークの中でいろいろなことが解消されて行きます。

そんな中で牧師の役割は、私たちの日々の営みに対して、聖書の言葉を通して、私たちの現実を整えるきっかけを与えてくれるサポーター的役割があるように思います。そういう意味では牧師はプロデューサー的な働きをし、舞台上で演じるのが教会員。その後ろにいてプロデューサーとしていろいろささやいてくれて、大事なキーワードを与えてくれる、そして、私たちがいろいろな困難に陥ったときにそのことの可能性や意味をメッセージとして伝えてくれる。そうすると、否定的な現実が、前向きな現実として見えてくる、そういうことをささやく人としていてくれる。ですから、牧師さんがリーダーシップを発揮してひっぱって行くという期待は浦河ではありません。(笑)

質問 F 二つ質問します。向谷地さんが今、べてるにいななくなっても、同じようなことが引き継がれて行くという、そういう地盤がすでに出てきているか、ということ。もう一つは、キリスト教を母体とする必然性、あるいはそうじゃないアプローチでもそういう共同体は可能と考えるか。あるいは、そんなことは考えずに自然とここに至っているのだからそのようなことは考えたことがない、という感じなのか教えてください。

応答 べてるで言えば、実質、私はべてるに顔だすのは週一回が限度ですから、私が居ないと動かないという組織ではありませんし、べてるが育ててきた精神は、当事者研究やべてるの理念という形で受け継がれていくための工夫をいつも続けています。浦河教会も、私は、役員ではありますが、そんな影響力を持った人ではないと思います。浦河の教会は、誰か一人に引っ張られる、ということではなく、それぞれによって支えられています。

普遍性ということ言えば、先週末は、大谷学院という、本願寺の住職さんを養成する学校でお話をしてきました。最近お寺さん関係から呼ばれることも多いんですね。縁があって、初めて奈良の大仏の裏側を見せてもらったり、天理教の方々も熱心にべてるに来られます。色々な違った経験を持ちながら生きている人たちがどう共同するか、ということにおいて、ひとつの可能性をもって受け入れられていると思います。

質問 G きょうはどうもありがとうございました。二つお伺いしますが、分かち合い礼拝を始めて、今は実践の積み重ねがあるというので、スムーズに行われているのではないかと思います。最初の時期は、一人ひとりが苦勞を語るといっても、いきなり語るという場にはなっていなかったと思うのですが、誰かがなんとなく導入するとか、そういう役割を持った人がいらっしやったのか、あるいは、今はどうなのか。というのがひとつと、あとは、弱さの分かち合い、弱さの情報公開、苦勞の輪郭、独創的なキーワードが浦河にはあると思うのですが、これは向谷地さんの才能、ということからきているものなのか、いつも芽えわたった言葉が次々と生まれてくるのか、その辺が不思議で仕方ないです。どうしてなのでしょう。

応答 最初の質問ですが、浦河では、あるメンバーさんの言葉ですが、言葉で語らないと、病気や爆発で語るようになってしまうことになる。ことばで語るというのは、唯、ロマンチックな理念ではなくして、そうしなければ生きていけない、という生々しい現実という裏付けがあります。語るということを怠ると病気になる、語ることを怠るとすぐ爆発しちゃう。だからコツコツと常に自分の言葉を発見して行く作業等が不可欠になります。証がそうであるように、そもそも、教会は、それをやって来たんじゃないかと思います。ですから、きっかけは様々だと思います。ただ、その語ると言うことに於いては、「三度の飯よりミーティング」の中では、決して強制されたりとか、だれかに強いられたりするものではなく、その人自身の中から浮かび上がってくる力としての言葉に意味がある。そこには、語らないことも OK という前提があります。

それから、べてる流の切り口の言葉というのはどうして生まれてくるかということ、私が一生懸命考えて思いつく、ということではなく、まさに場の中からにじみあがってくる。場の中から互いに見えてくるものです。それをいろんな人がいろんな言葉を生み出していく。私もそれを取り上げて言葉として使いこなしていく。べてるの当事者研究というのは毎月、『当事者研究』という雑誌にアップされていますが、その中には本当におもしろい言葉がどんどん生まれてきます。最近で言えば、「幻聴さんがたまったら、一人で抱え込まないで売ればいい」というのがあります。そういう人は実際にいるんです。「すみません、幻聴さんがたまってきたので、誰か欲しい人はいませんか」メンバーさんは心得えていて、「はい、買うよ」と言って、「はい一匹100円」とか言って、みんなでやり取りする。「はい、全部販売した。楽になりました」と言いますよね。そういう世界を作っていく。そういう世界から生まれてくる言葉みたいなものが切れ味につながっていく。その人自身の経験というものは、今までは異常だとか、妄想だとか、あり得ないこととか、そういうかたちで切り捨てられてきた、粗末にされてきた、という経験、言葉を大事にしてゆく、いわゆる妄想といわれているエピソードの由来というものも、ちゃんと根っこを掘り下げて行くと面白い、非常に人間味のある、素朴な経験から起きているということが結構あって面白い、ということですね。

話はそれますが、実は、10月1日(2012)に札幌市中央区にメンタルクリニック(なかまの杜クリニック)をオープンしましたので、ぜひ、いろいろな教会で抱えていらっしゃる方を受け止めて行けるように、起動力のあるクリニックにしたいと思っていますのでご利用ください。

質問 H 帯広で先生のお言葉を伺う機会があり、今日またここで伺うことが出来てうれしいのですが、分かち合い礼拝のなかに、今週の恵みの中でよかった点、更によくする点、今週の苦労などを分かち合われるということだったのですが、これは、その日の聖書の箇所とはどのくらい結びついているものなんでしょうか。統合失調症の方々、そうでないの方々、それぞれにどんなふうなのか、その辺りのことをお聞かせ頂けますでしょうか。

応答 礼拝ですから、その週の主題となる聖書の言葉をまずみんなで輪読して始まるのですが、中には今日の聖書の箇所「わかりません」といって、「だからきょう私は自分の話をします。」という人もいます。あるいは「今日の聖書の箇所は分かりませんでした」という言い方をする人もいます。もちろんみんなの語りを聞いて、「ああ、今日の聖書の箇所はそういうことだったのか、」ということが後で分かったりする。いろんな人たちがいます。

質問 I そこで、牧師が口を挟んで「それはここにこんなふう結びつきます」とか、気の利いたこと、もしくは野暮なことを仰ることはある？

応答 基本はしっかりと聴くということです。質問が出たら、それに対して、後ではなしてくれるということはあると思います。

質問 J この分かち合いはキャッチボールになるのでしょうか、或いは自分が投げて終わる、投げること、発することが重要なのでしょうか。それとも、順に感想を言ったり提案をしたりする、ということも結構あるのでしょうか。

応答 基本として、聴くということですが、笑ったり、相づちをうたり、とか、「すごいねえ」とか「おもしろいねえ」とか言ったりするのは結構あります。

質問 K 道東地区の女性の修養会に先生ご一行が来て頂いてよい集会となり、ありがとうございました。その修養会が終わってから、あるメンバーが私に向かって、「あなた牧師さん？くれぐれも健康には気をつけたほうがいい」といわれて、私は励ましを与えられましたこと、ここで報告したいと思います。あと、先生のお話しの中にも出ていたと思うのですが、メンバーみんながプロのお笑い集団ではないかと言うくらい、トークが非常にうまくて、笑いのつぼをちゃんと心得ている、すごいな、という感じがあったんですけど、これは、最初から、人間としてしゃべる素質を持った方々なのか、あるいは、語ることによって、笑いをとりながら説得性のある話しをするようにみんながなって行ったのか、そのあたりをお聞きしたなど。やはり深い苦悩の部分を通して開放されて行く面があるから、おなかの底から笑わせてくれるところがあるのかなあ、と自分なりに思ったのですが、いかがでしょうか。

応答 道東地区の婦人集会に呼んで頂きまして、浦河の精鋭とまでは言わないまでも、「適当に見繕ったメンバー」とお邪魔をしたのですが、とても恵まれた集会で私たちもとてもおもしろかったです。それで、先ほどお話ししましたように、幻覚妄想とか、発作を起こしたり、爆発ということは、基本的に言葉が封じられた状態。だから、病気で語るのではなく、その人の言葉として、その人の中のただうらみつらみではなく、経験を可能性のある言葉に発酵して行く、体験が熟して行く中で言葉が暖かい言葉に変わって行く、いわば野菜屑が黒土に変わるという有機的な変化を遂げる、ということが私たちは言葉になるイメージなのです。そのプロセスは、常に私たちは「問題」を話し合わないという文化を作ってきました。べてるが始まった1983年から、そこで、一貫して「問題」を話し合わない、ということで、まず、その週の恵み、苦勞したこと、さらによくするために変えて行きたいこと、その三つの軸で、コミュニケーションを重ねてきました。問題を話し合う時は常に自分のこととして話し合うとその人自身の経験が、黒土に変わっていくという場になるということを経験させられている。

もうひとつは、なぜ彼らは語れるかという、浦河には「評価」という軸がない、他者評価から自由になる、ということ。だから、忘れもしない、潔さんが始めて講演に呼ばれたときには、潔さんが、私たち基本的に帯広に呼ばれた時もそうですが、打ち合わせしないんですよ。事前に、きょう、こういうことだから、こういうことをお話ししようね、といわず、「今日のテーマはこれだから、みんないいですか」くらいは確認しますが、基本、打ち合わせはしないです。ちゃんと打ち合わせをすると、どういうことが起きるかという、舞台の上で緊張したり何をいつているのか分からなくなるですね。打ち合わせするから真っ白になるんですね。決められたとおりに、準備してきたとおりにやらなければならない、その前提があるから真っ白になる。ところが、その場、その場

で気付いたこと発見したことをありのままの言葉で語る、たとえば、潔さんが一番最初に講演に呼ばれたきは、舞台上がってにやにやしている。「きょうのテーマなんだっけ?」「浦河の紹介でしょ」「浦河って人口何人だっけ」「1万6千人だよ」「そんな中でべてるが始まったんだ それで、あれ、それで、それで…」と、そんなことでスタートして、「おれ分かんなくなって、タバコ吸いたくなった。おまえしゃべって、おれタバコ吸ってくるから」そんな講演だった。そしたら、それが大うけでした。そしたら、「これでいいんだ」という感じ。

それからもうひとつの大きな経験は、一番最初に潔さんと私たちが下請けをして、昆布の製品にならなかった昆布を切って、工作鋏で細かく切って、パックに詰めてそれを販売するというのを、今から三十年前に教区総会で潔さんが初めてやった。ところが潔さんその緊張から二日前に入院しちゃった。入院したにもかかわらず外泊をもらって、教区総会に昆布をもって乗り込んだんですけど、もう売るところの話じゃない。ほとんど寝てて震えてたんですね。そしたら、婦人会のみなさんが売り子をしてくれて、なんと完売しちゃった。そしたら、潔さんは「病気悪いほど昆布売れるかもしれない」となったわけです。どんどん反転してゆく。

そういう反転の経験が「ああ、いいんだ」という、「これで語れるんだ」という、そこで、外の人たちにちゃんと語らなければならないということではなく、この語りの切り口でいいんだ。行こう、それが今みんなの語りを促進する原体験となっている。だから、なにも恐れるものはない、もし、舞台の上で固まったら、「すみません、いま、固まりました」と言えばいいだけの話しです。

ありがとうございました。

大変興味深いお話しで向谷地さんのご講演といただいた質問で、豊かな時となったと思います。ありがとうございました。

最後に向谷地さんに感謝の拍手をお送りしたいと思います。

(まとめ：宣教研究委員会)

講師 向谷地生良(むかいやち いくよし)

浦河伝道所会員

北海道医療大学看護福祉部臨床福祉学科教授

社会福祉法人浦河べてるの家理事

浦河赤十字病院ソーシャルワーカー

自称 “ 相談するソーシャルワーカー ”

